映画「生命（いのち）の冠（かんむり）」（昭和十一年制作）

映画「生命の冠」は、当時外貨獲得の花形産業といわれた蟹缶詰工場を営む兄弟が不漁等で経営が悪化していく中、輸出先との契約を優先し、不良品でもいいので缶詰を契約数どおり製造しようと主張する弟と、破産覚悟で契約どおりの品質にこだわった一等品の缶詰を製造しようと主張する兄との対立を軸に経営者家族の葛藤を描いた作品です。

制作配給	日活多摩川
制作年	昭和11年（1936年）
公開	昭和11年6月4日
上映時間	トーキー版／94分 サイレント版／55分
原作	山本　有三
脚本	八木保太郎
監督	内田　吐夢
配役	
有村恒太郎	岡　譲二
妻・昌子	瀧花　久子
弟・欽次郎	井染　四郎
妹・絢子	原　節子
乗組員北村	伊沢　一郎
片柳玄治	見明　凡太朗

山本有三先生の「生命の冠」のシナリオを作るため、脚本家である八木保太郎氏が国後島へ渡ったのは昭和十年三月頃でした。渡航の目的は古釜布にある蟹缶詰工場でした。工場は根室の碓氷氏の経営で働き手は青森・秋田・岩手あたりから来ていた季節労働者でした。女工の仕事は仕分けをした蟹を缶に詰めるというもので、早朝から夜遅くまで立ち通しで過酷な重労働のように思えたと八木氏は後に語っています。彼女たちは疲れると眠気覚ましに女工節という唄を歌っていたそうです。

（出典）劇団フジ定期公演「流氷を渡る女たち」（昭和五十七年）解説プログラムより

国後島古釜布の碓氷工場前での記念写真
（野田工場長のアルバムより引用）

【右】碓氷工場での女工さんの作業風景
（碓氷ミナ子氏講演資料より引用）

【左】碓氷植内工場の海老缶詰製造風景
（野田工場長のアルバムより引用）

映画「生命（いのち）の冠（かんむり）」（昭和十一年制作）（その二）

写真は古釜布にある碓氷缶詰工場工場長の奥様である野田みつよさん（右）が主人公の弟役の井染四郎さん（左）に女工節を教えている所です。「生命の冠」のトーキー版（音声付、上映時間九十四分）ではエキストラ出演した女工さんたちが女工節を歌う場面があるとされていますが、サイレント版（無声、上映時間五十五分）ではそのシーンはカットされています。なお、トーキー版フィルムは見つかっていません。

映画製作の途中で海に仕掛けた網を引き揚げに出た船が遭難し、乗組員十三人が亡くなってしまうという事故が起きました。脚本家である八木保太郎氏は、事故前後の工場の人達の心の動きに胸を打たれ、ドラマの中心にこの海難事故を描くことにしました。映画の中では実際に行われた葬儀がそのまま撮影され、上映されています。

（出典：劇団フジ定期公演「流氷を渡る女たち」（昭和五十七年）解説プログラムより）

（出典：「道新Today」平成元年六月二十五日発行の旧島民座談会より）

映画撮影風景

大きなタラバガニを担ぐ二人の少年と俳優の伊沢一郎氏

担いだタラバガニの脚先が地面に着くほど大きく、棒肉の太さも親指と中指で作った円よりも太いもので、当時のタラバガニと比べると、いま捕れるタラバガニはカニとはいえない位に小さいものに見えます。

（写真はすべて野田工場長のアルバムより引用）